

「主をほめなさい」

ネヘミヤ記 第9章1節～8節  
ペテロの第一の手紙 第2章1節～10節

説教 村上修平牧師

ネヘミヤ記は城壁再建の話です。エルサレムがバビロニアに滅ぼされた時、城壁は破壊され、人々は殺され、生き残った者はバビロニアに連れて行かれました。この荒れ果てた街を再建・復興する話です。古代、中近東の街は周囲を城壁で囲まれていました。これは敵の侵入を防ぎ、自分たちの家族や生活を守るためです。そして、城壁は古代だけのものではありません。私達の人生、家庭、教会、地域の安全や平和を守るために私達にも城壁が必要です。そのために、私達は神の恵みをしっかり受け止め神の真実に信頼する必要があります。これが私達の城壁です。

バビロニアに捕囚として連れてこられたネヘミヤがペルシャの王の給仕役をしていた時、彼の許に故郷エルサレムから仲間が来て、故郷の街が荒れ果て見渡す限りがれきの山で、人々が困窮していることを伝えました。この知らせに彼は何日も嘆き悲しみました。私達もしばしば立ち上がれないほどの悲しい事に直面します。このネヘミヤもそのような悲しみを知っている人で、苦しみの中にある仲間を思い痛みを覚えました。けれども、彼はそこで立ち止りませんでした。彼はその悲しみを負ったまま、その場で神様に祈ったのです。「それでも」神様はよい方、真実な方で、私達のこの悲しみを喜びに変えて下さる」、そう信頼し祈ったのです。

昨日私は愛する兄弟が思いもかけない仕方で突然神の御許に召されたとの悲報を受けました。兄弟は大阪教会の為に喜んで、本当に熱心に奉仕して下さいました。『村上先生も大変なんですね、僕が力になりますよ』と助けてくれ、岡村牧師も私も多くの支えと励ましを得ました。私はこの悲報に打ちのめされました。このような時私達はどうすればよいのでしょうか？今日私達に与えられた御言葉は、「今生れたばかりの乳飲み子のように、混じりけのない霊の乳を慕い求めなさい。それによっておい育ち、救いに入るようになるためである」（ペテロの第一の手紙2章2節）と教えます。霊の乳というのは主イエスの御言葉のことです。「人はみな草のごとく（中略）草は枯れ、花は散る。しかし、主の言葉は、とこしえに残る」（1章24～25節）。私達は『主の御言葉に望みを置きなさい』と示されているのです。この兄弟も御言葉を大切にしておられたことを覚えます。朝起きて新聞やテレビを見る前にまず神様の御言葉を読む習慣は、お父様

から受け継いだ堅い信仰の表れだと思います。

では、混じりけのない主イエスの御言葉とは何でしょうか。主の十字架上の7つの言葉が心に浮かびます。主は「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」（マタイによる福音書27章46節）と祈られました。『神様、なぜですか！』、私達もそのように神に問うてよいのです。しかし、祈りは変えられていきました。最後の祈りは「父よ、わたしの霊をみ手に委ねます」（ルカによる福音書23章46節）、神に対する信頼の祈りでした。神は私に決して悪をなさない、どんな時も愛していて下さる、ここにいる私達は、この神への信頼を与えられるため今日ここに呼ばれたのです。今は理由が分からず不幸としか思えない出来事も、しかし、必ずそこに神の恵みが隠されています。なぜ、そう言えるのでしょうか。十字架はもともとは恐ろしい処刑の道具でユダヤ人にとっては呪いの木でした。しかし、主イエスの十字架は今や私達の罪の赦し、救いの印に変わりました。多くの人に慰め、希望、命を与えてきたのです。

さて、ネヘミヤ記9章に「主をほめなさい」（5節）とあります。主を讃美する理由があるのです。神に逆らい続けるイスラエルの民の救いの歴史を通して神がどういうお方であるかが示されています。「しかしあなたは罪をゆるす神、恵みあり、あわれみあり、怒ることおそく、いつくしみ豊かにましまして、彼らを捨てられませんでした」（17節）。「あわれみ」は、親が愛する我が子を胸に抱くイメージの言葉です。皆様も、全てをご存じの神様の御胸に抱かれているご自分を想像してみてください。そして、もしここに自分の犯した過ちの為にいたずらに自分を責めている方がいたら、もう責めるのを止めにしていただきたい。神様は私達が罪人であることをご存じの上で『あなたの罪は赦された』と宣言して下さいます。神様の胸の中で安らぎを得、人生を復興させていただきましょう。神の呪いは十字架で完結されました。今私達に残されているのは祝福だけです。そして、イエスを信じるものは、死では終わらない、永遠にイエスと共に生きる、そのことを確信をもって受け止めていただきたいと思います。

（説教要約奉仕者）